

## 『パンセ』とメタテキスト（その3）

### —未完成エクリチュールの徴候についての試論—<sup>1)</sup>

末 松 壽

#### §6 メタテキスト・備忘録の言語学的特徴

メタテキスト及び備忘録のコードとしての特徴は、一言でいえばその省略にある。既に何度かその現象を指摘する機会があったが、ここでより組織的に考察しよう。様々の省略体を記述し目録を作製する前に筆者の方針を述べておく。

本稿で立ててきた『パンセ』におけるテキストの分類は以下のものであった。

0	I	II
全テキスト…	1. 純粹テキスト	1) 註釈
	3. 非備忘録メタテキスト…	2) 繋ぎ
	2. 非メタテキスト備忘録 (備忘録テキスト)	3) 標題・(目次)
	4. 備忘録メタテキスト …	1') 註釈
		2') 繋ぎ
		3') 標題・(目次)
		4) その他の備忘録

このうち、目次（IIの3、3'）とは断片束の標題の集合であるから、以下の調査においてはこれを標題に一括する。註釈（IIの1、1'）については、既に言及した人称性の問題と出典記載に際しての省略法にほぼ尽きている。これも独立には取り上げない。繋ぎは、既にテキストになったもの（IIの2）は、他のメタテキストが示すような特徴を示すことはないので考察の対象から外す。未だ備忘録の状態にあるもの（2'）のみをそれとして論ずる。従って以下、標題と備忘録について言語としての特徴を見ていく。但し前者については、レヴェルの相違は関与性をもたないので考慮しない。また備忘録としての標題（3'）とそうで

ないもの(3)との判別は実践的には不可能であるのみならず、まもなく見るようにこれまた関与性をもたないので考慮しない。備忘録については、下書テキスト(Iの2)とメタテキスト(IIの4')の相違はこれまた差別しない。但し、後者の例となる引用文には区別のために・印をつけることにする。標題の場合には備忘録か否かを問わずに取り上げ、備忘録についてはメタテキストかテキストかを問わないことになる。最後にこの調査の範囲は、原則としてS版によるA《1658年の構想》に含まれる合計414の断片に限る。これは《目次》を別にすれば、L版の《分類された》27の東及びいわゆる《未分類第一連》から成る。コーパスとしてはこれで十分であろう。

## 1. 標題の特徴

標題は何よりもそれが名詞連辞体(syntagme nominal)によって形成されることが圧倒的に多いことで際立っている。けれどもそれ以外の事例もないわけではない。順次とり上げる。

### a) 名詞連辞体

便宜的に区別すれば、この中にはまず《Ordre》や《Vanité》(空しさ)のように、孤立した名詞がタイトルになっているものがあり、これは夥しい数に上る。次に《Raisons des effets》(結果の理由)とか《Morale chrétienne》(キリスト教のモラル)のように前置詞を介して二つ以上の名詞が結合したものとか名詞に形容詞その他が結合したグループがある。これもまた数多い。これまでに本稿で引用ないし言及した標題の大部分がそのことを証言する。列举すれば次の通り：

Contrariétés(S. 151), Commencement(182, § 1), Lettre pour porter à rechercher Dieu(38, § 2), Preuves de la religion(21), Raison des effets(123), Misère(22, 103, IV章標題), Soumission et usage de la raison(XIV章), Transition de la connaissance de l'homme à Dieu(XVI), Perpétuité(255, 398), Pensées de Pascal ... (初版の標題), Fin de ce discours(680), Première partie: Misère de l'homme sans Dieu. Deuxième partie: Félicité de l'homme avec Dieu(40), Préface de la première partie, Préface de la seconde partie(644), Seconde partie(181), Ordre, conclusion(1), Ordre par dialogue(38, § 3), Ordre(46, § 4; 573, § 5)。

また名詞節と呼ぶべきものもある。補足詞queが導く節で、《Première partie: Que la nature est corrompue ... Deuxième partie: Qu'il y a un Rédempteur ...》(40, § 3)とか《Que la loi était figurative》(律法は表徴的であった)(XX章)がそれで、他にも例は散見する<sup>2)</sup>。

このように、標題の特徴とは、それが名詞連辞体であること、名詞(グループ)

は頻繁に限定詞 (déterminant. 例えば冠詞) を欠くことにある。上に列挙したものは、例外なくこれら二つの少くとも一方の特徴を具えている。

題と副題とがいずれも限定詞ゼロの例：

Raison des effets.

Renversement continué du pour au contre

(結果の理由／正から反への絶えざる転倒) (127-93)

もある<sup>3)</sup>。なお、このメタテキストが先導するテキストは、「こうして我々は人間が空しい (...) ということを示した」という《繋ぎ》のメタテキストで始まっている。限定詞の省略は高度に義務的であって、普通には定冠詞と共に用いられる所有代名詞においてすらそれが起きる。例えば、

俺のもの、お前のもの

《この犬は俺のだ》《ここが俺の陽なたぼっこの席だ》とあの哀れな子供達は言っていた。

これこそ全地上の占有の起源でありイマージュである (98-64)<sup>4)</sup>

において、標題は定冠詞を欠く《Mien, Tien》なのである。これが同時代の規範に照らしても《違反》であることは、ポール・ロワイヤル『文法』(1660)の次の記述を見れば明らかである：「常に冠詞を伴い、名詞なしで用いられる他の代名詞 ... がある。mien, tien, sien, それに複数の notres, votres である<sup>5)</sup>」。勿論そこで言う冠詞とは定冠詞のことである。

単独の名詞または名詞グループで成る標題に限定詞が紛れ込むのはむしろ珍らしい。例えば《人間の偉大》なる題名は断片149-117では定冠詞を伴っているが、30-411では無冠詞であり、目次にも《Grandeur》(偉大)なる形が見える。《Le souverain bien》(至上善) (S. 1) が定冠詞をもつのはそれが語義的に、従ってまた慣用からして義務的なためであろう。《La gloire》(栄誉)なる標題 (97-63)<sup>6)</sup>も《L' ordre—Contre l' objection que l' Ecriture n'a pas d' ordre》(329-298) と共に例外である。限定詞を有する名詞連辞体タイトルの枚挙はこれではほぼ完全である。

## b) 前置詞連辞体

名詞連辞体に A, Contre, De などの前置詞の付された標題も散見する。参照したばかりの《聖書には秩序がないという反論を駁す》(329) はその例だが、他にも《Du péché originel》(原罪について) (309-278)<sup>7)</sup>、《Contre le pyrrhonisme》(懐疑論を駁す) (141-109)、《Contre Mahomet》(マホメットを駁す) (239-207) がある<sup>8)</sup>。

既に見た《A. P. R.》とは広く A Port—Royal のことであろうと考えられている。

P. R. なる略字が断片97-63に現れていて、これをニコルが第一写本上で Port-Royal と補全しているという事実がその根拠の一つになっている (T.-A., 63, note). この推測を承認し従って A を前置詞とし、更に《A. P. R.》を冠した断章群の起源をパスカルの護教論に関する講演に位置づける人々は、この標題がテキスト使用の機会や目的を示すものとして《ポール・ロワイヤルに宛てて》とか《～のために》とか理解するだろう。又は口頭発表の場を示すものとして。しかし書く行為の場を示すものとして《ポール・ロワイヤルにおいて》と解釈することも不可能ではない。これはまた想像力を刺戟せずにはおかない仮設であろう。こういう a は書翰やルポルタージュにおいて見られる。実際、兄妹のジルベルト宛書翰の一つには《A Paris, ce 5 novembre, après-midi, 1648》と記されている<sup>9)</sup>。いずれにしろ《A. P. R.》はテキストを意味論的に表象したり要約したりする機能をもたないタイトルということになる。(まもなく触れるように) これは何の略語か必ずしも明らかではないが、XII 章の標題であり、またその章で単独の断章 (182-149) 及びⅧの断片155-122, XIXの274-149の題となっている。

### c) 形容詞 (連辞体)

「実体はそれ自身で存続し」とランスロは書いている。「それに対して偶有は実体によってしか存在しない」ように、「実体を意味する語である」実体名詞は「言説においてそれ自身で存続する」のに対して「偶有を意味する語である」形容名詞は、「言語において単独では存続しない<sup>10)</sup>。」つまり基体 (sujet) たるものをそこに明示するか暗示しなければならないからである。かくして標題の場合でも形容詞が単独で出現することは極めて珍である。《A. P. R.》(182) には、《Incompréhensible》(不可解) なる形容詞を中見出しに掲げた短いパラグラフがある (S. p. 109). 続く長い段落も《Incroyable que Dieu s' unisse à nous》(神が我々に結合し給うとは信じられない) なる形容詞句を見出しとしている。

ところで上の例は、文法的なセンテンスであるために不可欠の要素、主辞となる名詞やそれを賓辞と結合する動詞を削除されて孤立した賓辞 (属詞) であると考えることができる。《Il est》等を補えば文法性は充足する。コーパス外にある《Incompréhensible que》の導く一連の《dilemmes》<sup>11)</sup> を並べた断片 (656-809) についても同様である。他に一例、否定詞を伴う属詞をタイトルにした断片があることを追加しよう。使徒達が律法に背いて割礼を廃止したという『使徒行録』第十五章の記載に註解するテキスト (400-367) は《Point formalistes》(形式主義者ならず) を題名としている。

#### d) 不定詞

《Aveugler, éclaircir》(盲目にする, 照らす) という意味論的に対立する二つの不定詞を標題として並べた断片がある。その意味は本文を読むことによってわかる。即ち,

選ばれた者達を照らす (éclaircir) に十分の明るさと, 彼等を遜らせるに十分の暗さがある。見捨てられた者達を盲目にする (aveugler) に十分の暗さと, 彼等を断罪し言い訳のできないようにするに十分の明るさがある (268-236)。

ジャンセニストが主張する限りでの宗教的啓示の二重に重複した二義性である。他方, 第 XVIII 章の標題は《Rendre la religion aimable》(宗教を愛すべきものにする) となっている。これが II 《秩序》の一断片の《La rendre ensuite aimable》に対応することは既に見た (§4)。双方の構文も同一である。XVIII 章のタイトルがこの断片で再表象されているともいえるし, 逆に断片が章のタイトルになったともいえる。ところで《秩序》の文は書き手が仕事の上での指針を書きとめたメタテキストに属する私的な覚書であったように, この章の題目も作品制作の方針を示すことに変りはない。不定詞構文は宗教の提出の仕方をめぐる書き手の努力目標を記載しているのである。それに対して《盲目にする, 照らす》は, 主題である啓示のあり方そのものを要約する重要語句に他ならない。その意味では, 共に不定法現在による標題でありながら, 二つは身分を異にする。後者は続くテキスト本体との意味論上の関係で機能的にメタテキストであるが, 前者は主題および書記行為の再帰性を二重にマークされた備忘録メタテキストである。不定詞を標題にとるものは以上に尽きる。

#### e) 完全文

これまでの調査は, 完全なセンテンスが標題においては使用されにくいことを示している。文章が文法的であるための不可欠の要素がそこで脱落するからである。けれども完全な文法性を具備した文が標題になることも稀には起る。目録を完成するためにはそれを見落とすことはできない。

先づ章の標題として, 目次に《La nature est corrompue》(本性は腐敗している) というのがある。ところが分類された束の中には, 一見してそれに対応するテキスト(群)は存在しない<sup>12)</sup>。これは『パンセ』の構成の研究にとって一つの難問であり, またそれ故に作品の生成の考察にとって一つの手がかりにもなる。この奇妙な事実の解釈としては, 筆者は二つしか知らない。一はセリエの, 他はメナー

ルのそれである<sup>13)</sup>。S版はその解釈に基づいてXVII章の標題を《La nature est corrompue et Fausseté des autres religions》(p. 135)としている。これが完全文と名詞連辞体(しかも限定詞不在)との結合というぎこちなさを示すことは言うまでもない。ともあれ、同じ独立節は一断片の標題にもなっている(35-416)<sup>14)</sup>。

もう一つ、《専制とは自己の秩序をこえての普遍的な支配欲に存する》(92-58)というのがある。ここには、逆説的な一予想される正説(doxa)を論駁し一気の利いた定義を下すことに存する一種の言語遊戯あるいは箴言づくりがある<sup>15)</sup>。このような文学趣味が護教家に無縁でなかったことはもう一例を以て確認することができる：《Diseur de bons mots, mauvais caractères》(549-670)。句切り(césure)を中央にもつ10音節詩句(その対句法bons-mauvaisにも注目しよう)は、限定詞及び動詞の省略と相俟って諺の様相を帯びる。無論、ここでの省略体は、メタテキストや備忘録におけるそれとは異なる、文学ジャンルに属する問題である<sup>16)</sup>。以上で、数少ない完全文による標題の列挙は完了する。

#### f) 省略語・符号

最後に、読者の推理心を唆る現象を指摘しよう。標題が覚書を兼ねることがあるという事情に由来する書き手特有の略語や符号の使用である。イエス・クリストをJ. C.と表記するのは『パンセ』では頻繁だが<sup>17)</sup>、これは一般的な習慣であるから殊更に注目することはない。

先に見た《A. P. R.》についてはそうはいかない。煩瑣な議論になるが、ここでその謎について註釈しておこう。これがA Port-Royalの略字であろうとする解釈に関しては、メナールは「フォージェール…以来、仮説は常に認められてきた」と書き、自らもこれを仮定している<sup>18)</sup>。因に、『草稿』におけるポール・ロワイヤルの表記を枚挙すれば、無冠詞の《les enfants de P. Royal》(97-63; *Le Manuscrit*, p. 50)の他に、《le P. Royal》(451-909; *Ibid.*, p. 299), 《le por Royal》(746-916; *Ibid.*, p. 307), 《1 P. R.》(792-957 [955]; *Ibid.*, p. 328)と定冠詞を伴う形が多く現われている。またA. P. R.の表記は、A P R, A P R., A P. R.(2回)(*Ibid.*, pp. 79, 81, 84, 62)と様々によめる<sup>19)</sup>。他方セリエは、「これらの略語の意味は不確かである」(S. p. 105)とノートしている。実際ポール・エルンストはこれに別の可能な解釈を提案しているという。即ち、1°《Apologie à Port-Royal》(ポール・ロワイヤルにおける弁証論)、2°《Apologie Pour la Religion》(宗教のための弁証論)、そして3°《Apologie : Prosopopée de la Religion》(弁証論：宗教の擬人法)である<sup>20)</sup>。

間接的な引用では、才知あふれるベルギーの学者がどこまで本気にこの意表をつく《暗号》解説を主張しているのかわからないが、筆者にはそれらは大した蓋然性をもつとは考えられない。まず三つの解答に共通する《apologie》。現代のバスカル研究者においてならいざ知らず<sup>21)</sup>、そもそもこの用語は、『パンセ』全体を通して、《秩序》の束においてすら、一度も出現しないのである。その上、2°については《apologie》なる語が普通 de を介して補語をとる慣用にあることを思い出そう。確かに例外的にピロ神父の *Apologie pour les casuistes contre les calomnies des jansénistes* なる文書はある。起草にバスカルも関与したとされる『パリの司祭のための弁駁書』がこの題名を記している<sup>22)</sup>。もともとラテン語法に倣うこの《pour》は<sup>23)</sup>、次の《contre》との対比で要請されたものではないのか。上記弁駁書に続く第二の文書：*Réponse des curés de Paris pour soutenir leur factum par lequel ils ont demandé la censure de l'Apologie des casuistes ...* (『決疑論者の弁明』を検閲にかけるよう要求した弁駁書を擁護するパリの司祭達の返書) が、事もなげに《pour》を《de》に置きかえている事実は雄弁であろう (L. O. C., p. 476)。3°については、成程《prosopopée》なる語は一種の中見出しとして、《A P. R. Pour demain/Prosopopée》(明日のために/擬人法) (S. p. 107) なるメタテキスト(講演前日の稿か?)の内に現れてはいる。だがまさにそれ故に困難が生じる。言説の形式を指定するこの修辞学用語は<sup>24)</sup>、《第一稿》(S. p. 105) はともかくとして、同じ標題を冠せられた S. 155, 274 には適当しない。《第一稿》では中途から《人間》とよばれる読者の呼び出し(évocation)がなされ、二人称単数の頓呼法(apostrophe)による話しかけが現れるものの、他の二つのテキストについてはこの想像にかかわる文彩は全く認めることはできないからである。以上、A P. R. が A Port-Royal とは別の語を表象することは困難であろうとする理由である。次に、逆に A Port-Royal を A P. R. と略すことは容易であり自然でもあることはいうまでもない。実際それがかなり一般的な習慣であったことは、18世紀にデュクロが《MM. de P.-R.》や《Grammaire de P. R.》を多用し、デュ・マルセがランスロの1644年の著書名を *La Méthode latine de P.-R.* と表記する事実からしても推測できる<sup>25)</sup>。以上の理由によって、《A P. R.》は A Port-Royal と復原するのが現在のところ最も妥当であると筆者は結論する。

H という文字を戴く幾つかの断片もある。XVI 章《人間の認識から神への移行》に分類された一連のテキストの標題部分は次の通り：

229-198 : H · 5

230-199 : 9/H Disproportion de l'homme<sup>26)</sup>

ここで H とは Homme (人間) の頭文字であることを註解書と共に認めよう<sup>27)</sup>。セリエは更に、13 という数字を冒頭にもつ抹消された断片 (111-76) についても、それが多分 H. 13 のことであると推定している。厳密に云えば、H は言説の意味論的表象である限りにおいて下書かつタイトルという二重性をもつが、数字の方は一定量のテキストを支える物材としての紙片の整理番号であって、純粹にメモに属する。数字は断片と断片とを連繋する (或いはしていた) のであろう。

A P. R. にしろ H にしろ、それはテキストが暫定的であるという限りで使用されているのであって、書き手=読み手以外の者の目にそのまま触れる筋のものではなかったことを確認しよう。

## 2. 結果の理由

コードとしての標題の特徴は以上の通りである。標題においては完成された文章は極めて少なく、言語は省略・簡略化をめざすと言える。この傾向は文法性の規範を犯すことも辞さない。省略は大別して二つの方向を示すように思われる。まず名詞については限定詞の脱落が最大の特徴となる。他方、動詞は不定法現在に留まる傾向がある。

これらの事実は誰でも経験している。贅言を以って分類などするには値しないと思われようか。しかし問わねばならない：これら二つの方向とは互いに無縁の現象にすぎないのか。それに一体、標題の付け方がこのようになるという事実をどのように考えたらよいのか。伝統や流行を成すこのような言語使用には、幾つかの理由ないし側面があると思われる。まず情報理論が発言権をもつ。

第一に、それは来たるべきテキストを予告するものとして、エスカルピも述べたように (§3-4)、あらかじめ重要な語句を目立たせる。ただ、標題は書き手にとってのみ用途があるのではない。確かに書き手は冗長性をもつメタテキストの提示によって、読み手の注意を方向づけ、理解を確実にすることを目指すだろう。だが読み手の方はテキストを読みながら又は読み終って、それを以って何かを為すために多かれ少なかれ意図的に言説を把握し直そうとする。前以って突出したメタテキストはこの時、彼にとっての標識となる。その意味では標題や見出しは予告でありつつ、また書き手によって提案されたいわば読み手の《備忘録》であるということができる。

第二に、書き手は可能な限り冗長性を最小限に留めるという儉約の配慮も持つ。それ故に選ばれるのは重要語句のみである。この理由は多くの省略体を説明する

が、全ての標題にとって有効ではない。というのは、わざわざ補足詞 *que* を伴った節が標題になることもあり（註釈2参照）、これは儉約の規範に反する。単に物理的な経済性の原理からすれば、これらは矛盾した現象となる。この矛盾はもう一つ別の、言語学的説明を要請する。

第三に、その手がかりとしてフレデリック・ドロップルの指摘を参照しよう。『フランス文體論・詩学<sup>28)</sup>』の中で、マロとセーヴの詩を解説しながら、文法学者であり文学史家である人は、冠詞それも特に標題における冠詞の有無に注目してこう書いている：

あらゆる冠詞が《現実化》する。即ちある語を（記憶の、辞書の）潜在的存在領域から現実的な存在領域へと移行せしめる。もしくは、言語学者達がいうように、言語のレベルから言説のそれへと移行せしめる（*op. cit.*, p. 43-44）。

この指摘は、我々がいま問うている問題を、*mutatis mutandis*、全体的に照らしてくる。冠詞ゼロの標題についてのみではない——ギローは言う：「冠詞は名詞を現実化し、現実的で具体的な状況に置き直す。冠詞の不在は名詞を潜在的なものとしてマークする<sup>29)</sup>」。そしてギヨーム：「これら冠詞の一つを選び他を保持しない可能性は言語の事実、言語によって言説にもちこまれる許可である。が選択そのものは既に言説の事実である<sup>30)</sup>」——顕在化されない語、或いは未だ言説（*discours*）となっていない言語（*langue*）という規定は、筆者が列挙してきた大部分の徴候に該当する。*que* を伴うことによって文は名詞化（*nominalisation*）を受け、普通それ自身では自律的に存在し得ない状態に落ちる。動詞が不定詞の形で現われるのは、それがまさに辞書におけるが如きあり方に留まるということに他ならない。クレッソは言う：「実体詞と動詞とは現実化されることが必要である。動詞はその人称・時制・法・アスペクトの語形によって現実化される。定義からして不定詞は非現実化されている<sup>31)</sup>」。孤立した形容詞と同様で、それは適当する基体を示すことによって自らを現実化する。ランスロとアルノオは言う：

かくて《赤い》の判明な意味は《赤さ》である。だがそれはこの《赤さ》の基体を不分明に示すことによってそれを意味する。それが言説において単独では存続しないという事実はそこに由来する。それは言説において、この基体を意味する語を表示するか暗示するかしなければならないからである（*op. cit.*, p. 49）。

要するに、言語の潜在的なレベルにあるメタテキストを、テキスト本体が現実化し言説としていくのである。タイトルとは、言語の状態にあって待機しているテキストである。

このことは、先に観察した特徴が示す二つの方向性をより深い水準において統

一的に解釈し直すことを可能にする。というのは、圧倒的な頻度をもつ名詞連辞体の標題とは、実は動詞の脱落を前提にしていると考えられるからである。前置詞連辞体や孤立した形容詞（属詞）も実は共通に、（名詞グループのと共に）動詞の欠落を根本的な原因としている。二種類の傾向と見えたものは、こうしてより深い恒常的な一つの事態として把握し得る。動詞の欠損（欠如または人称・時制に応じた活用の不在）によって標題はもはやことば（verbum）ではなく、無限定の記号作用に還元される単語群になっていくのである。

このことに不可分の、というよりもその一つの様相と看做すことのできる事由がある。それは備忘録テキストの言語的徴候を検討することによって明らかになるであろう。

### 3. 備忘録の特徴

先にも出会ったように、備忘録の言語がよく省略に訴えることは人の知るところである（cf. Cressot, *op. cit.*, p. 114）。ユーリ・ロトマンも《文化の体系における二つのコミュニケーション・モデルについて》（1973）<sup>32</sup>の中でそのことに触れている。彼は発言には二種類あって、一は《私一彼》的なコミュニケーションにおける言葉であり、他は《私一私》的なコミュニケーションにおけるそれであるという（p. 98-99）。そして後者は前者からの「機能的構造的自立によって発達していく」（p. 110）。ヴィゴツキーが示したように、「外言から自己中心的発話、自己中心的発話から内言へと」自立していくのである。ところで自己コミュニケーションの特徴は、ロトマンによれば、まず「この言語の語の単純化」（p. 111）にある。即ち、

〈私一私〉言語の語が簡略化する傾向は、自分自身のためのメモの基本形態である省略形に現れる。結局こうしたメモの語は、指標となってしまう、この指標の解説は、何が書かれてあるかを知らなければ不可能になる」（p. 111）。

著者はこういう現象をトルストイやプーシュキンの作品について考察している。

覚書の言語について簡略化・単純化・指標化は語りうる。しかし第一に、主題の認定とか意味の理解がこの指標の解説に先行し、その必要条件になるというのは、いささか単純すぎる断定ではないのか。成程《A.P.R.》なる《暗号》は著者の結論を確認するようにも見える。しかし指標の解説とその指示対象またはコンテクストの把握の間には、部分の認識と全体のそれとの弁証法あるいは認識論的循環の微妙な関係があるのではないか。《書かれていること》をあらかじめ判明に知ることがなくとも、当の文章自体の微小文脈、作品全体や当の言語におけ

る習慣という巨大文脈、更にはその指標の発明がなされる状況という言語外文脈を考慮する時<sup>33)</sup>、あれこれの解説の試みに対して少なくともそれが正しくないという判定が可能になることもあると思われる。蓋し「我々は真理のイメージを感じるが、持っているのは虚偽だけである。」(164 [p. 90]-131) からであろうか<sup>34)</sup>。第二に省略は自明の事実としても、更に問のエネルギーを維持して、如何なる？を問う必要があろう。省略体の組織的な枚挙を行い、そして出現するかもしれない完成文をも含めて、それらが何を指向しているのかを問うことは無意味なことではなかろう。それによって《内言》の、或いは言語における《私性》の構造的自立（もしくは解体）のプロセスを明らかにできるかもしれないからだ。

重複を避けるために、備忘録であっても標題となっているものはここでは取り上げない。それ以外では、狭義のメタテキストでない下書きも考慮する。区別のためにメタテキストには・印を付けることにする。

これまでに参照してきた用例を再見ただけで、その目録は標題のそれに酷似していることがわかる。以下簡単に整理する。

#### a) 名詞連辞体

これまでに現われた例は以下の通り：

Bassesse de l' homme jusqu' à se soumettre aux bêtes, jusques à les adorer (S. 86, § 1); Macchabées depuis qu'ils n'ont plus de prophètes. Massor depuis Jésus-Christ (3); Morale. / Doctrine. / Miracles. / Prophéties. / Figures (21, § 3); Les psaumes chantés par toute la terre (37, § 4); Diseur de bons mots, mauvais caractère (549, § 6) ...

未来への貯えである数多い下書きからもう一つ例をとれば、

Athéisme marque de force d'esprit mais jusqu'à certain degré seulement (知性のしるしである無神論。しかしある程度まで) (189-157)

がある。名詞グループに一種の等位節が付着している。同格の名詞《marque》は当然として<sup>35)</sup>、冒頭の名詞に限定詞が欠けることは上記引用中の S. 86, 549 と同様である。動詞の省略は言うまでもない。等位節にも動詞は不在である。主節が完全文であればその必要は必ずしもないけれども。《mais》に続けて「それが真実なのはたゞ」(cela n'est vrai que) とかを補充すれば意味は明示的になる。(標題を除く) 備忘録メタテキストで孤絶した名詞連辞体は見出されない。不定詞節の補語となった名詞グループの例を引いておく：

• Transposer/après les lois/article suivant (次の箇条を法律の後に置きかえること) (111-76)。

消された断片の左余白の書き込みであるこのテキストは不定詞節（動詞連辞体）で、その内部に名詞連辞体が嵌めこまれている。問題の《次の箇条》に限定詞がないことを確認しておこう。

## b) 前置詞連辞体

前置詞に名詞(グループ)が従うものはこれまでに見た例のうちにはない。たゞ、本来ならばある主節にとっての状況補語節を成すべき前置詞プラス完了不定詞が、孤立して従って文法性を欠く形で現れるのは二例あった。いささかの類比はあるのでここで取り上げよう。いずれも《繋ぎ》テキストである：

- Après avoir montré la bassesse et la grandeur de l' homme (151-119).
- Après avoir expliqué l' incompréhensibilité (182-149, §1)

類比という所以は、これらが《Après la démonstration de...》とかの実体詞化した形に書き直すことができるからである。S. 151では、「人間は今や自分の値打を評価すべきである ...」という文が続いているが、既に述べたように、メタテキストにおける不在の言説主体はテキスト本体の主語（l' homme）ではない。示す（montrer）と自己評価する（s' estimer）は、異なる言語域に属する《存在者》の賓辞なのである。《示す》べき書き手の《私》は現れていない。S. 182では続くテキストの主語は《人間の偉大と悲惨》であって、これと《説明者》との間には同様の区別がある。要するにこの二節は、（前置詞が要求する）限定詞の存在によって名詞グループは現実化されながらも、全体としては主節—主語も述語も一、また相関的に言説主体を欠くが故に現実化されないテキストである。

もう一つ、《人間の学問と哲学の狂愚に関する書翰》なる標題が導くメタテキストを見よう：

- Cette Lettre avant Le divertissement / ... (この《書翰》は《気晴し》の前に) (27-408).

これが不完全なのは、名詞二つは指示代名詞と定冠詞で限定されながら、一方の名詞連辞体と他方の状況補語となるべき前置詞連辞体とが、肝心の動詞の仲介なしに無理な接合を受けていることにある。即ち前者が主語なら《Cette Lettre viendra...》（この書翰は ... に来るであろう）とか、目的補語なら《Je dois (Il faut) placer cette Lettre...》（この書翰を ... に置かねばならない）とか、或いは受動態で《Cette Lettre sera mise...》とかの動詞が欠落しているのである。

動詞の脱落と相関的に、主体（主語ではない）<sup>36</sup> が消えている事実も前記二例と同じである。これらのテキストは談話に属するにもかかわらず、そこで主体となるべき一人称が掩蔽されている。このことはすぐ見ることになる不定詞の事例

についても言える。

c) 形容詞

単独の形容詞や形容詞グループは『パンセ』の備忘録テキスト内に存在しない。

d) 不定詞

既に引用したものは多い：

- Et puis le *faire chercher* chez les philosophes... (38, § 2. 斜字体筆者. 以下同じ).  
*D'être insensible* à mépriser les choses intéressantes et *devenir insensible* au point qui nous intéresse le plus (2).
- *Parler* contre les trop grands figuratifs (286, § 3 - 1).
- *Parler* de ceux qui ont traité de la connaissance de soi-même (...) *Parler* de ceux qui ont traité de cette matière (644, § 3 - 4).
- *Voir* ce qu'il y a de clair dans tout l'état des Juifs et d'incontestable (42, § 4).
- *Transposer* après les lois article suivant (111, § 6).

唯一つ (S. 2) を除けば、全て書き手の計画を示すメタテキストである。新たな例を一つだけ追加しよう：

- *Plaindre* les athées qui cherchent. Car ne sont-ils pas assez malheureux? *Invectiver* contre ceux qui en font vanité (探求している無神論者に同情する。というのは、彼等は十分に不幸ではないか? そのことで自慢する者は罵倒する (188-156)).

この例においては、ある種の無神論者をあわれむ理由を述べている第二文のみが文法的に完全なテキストであり、前後の文はいずれもメタテキストであり、いずれも不定詞の構文である。以上の数多くの例から、書き手が作品の制作について何らかの指針をメモの形で自分に宛てて書き留める時、それは不定詞節になりがちであることがわかる。その意味ではこの構文はそれなりの文法性を具えた一種の命令文であるといえる。

事実、その独立的使用の一つとして、文法書は命令の不定詞を語っている：

忠告・命令・勧告がはっきりした相手に宛てられない時には、不定詞は完全に適している。極く広範な読者に宛てられたあらゆる文書においてそれが使用される所以である<sup>37)</sup>。

これは通常、料理の教本等におけるように、話しかけられる者が漠然と拡大された相手であることと相俟って、間接的で和らげられた命令である<sup>38)</sup>。けれども備忘録においては、不特定多数どころか書き手一人が読者である。また注意すべきは、この種の指図の仕方が、註釈における参照指示のそれに酷似している事実である。実際、註釈においてはそれは《*Voir...*》(... 参照) のように不定詞でなされることが多い。このことはメモと註釈との本質的類縁性に言語の面から光をあ

てる。最後に、メモでは主体の分化を示す二人称（書く私が読むあなたとなる）が、そして註釈では漠然と拡大された客体たる二人称がそれぞれ勧告を受け得るというこの融通性は、不定詞における本質的な人称性の不在によって説明されよう。

けれども、書き手の自己自身への勧告は常に不定詞によって表現されるわけではない。

#### e) 完全文

既に読んだ例文：

Il a quatre laquais (53, § 3-1).

• Voyez les deux sortes d'hommes dans le titre 《Perpétuité》 (209).

• Voyez 《Perpétuité》 (398).

• Voyez le Rond dans Montagne (313, § 3-2).

下書きのテキストである一つ (S. 53) を除けば、三つは全て命令法二人称による、自己に回帰する参照指示である。《Voyez》が不定詞と共に一般に註釈で用いられることは周知のことである。これら三つが《Voir...》となっても可笑しくないように、逆に d) でみたメタテキストの不定詞は命令法二人称の形でもあり得たであろう。

更に、完全文のメタテキストとして目立つのは次のような例である：

• *Il faut mettre* au chapitre des 《Fondements》 ce qui est en celui des 《Figuratis》 touchant la cause des figures (256, § 3-1. イタリック筆者。以下同じ)。

• *Il faut commencer* par là le chapitre des puissances trompeuses (78, § 3-1).

• ... Pour guérir cela *il faut commencer* par montrer que la religion n'est point contraire à la raison. Vénérable, en *donner* respect. La *rendre* ensuite aimable, *faire souhaiter* aux bons qu'elle fût vraie, et puis *montrer qu'elle est vraie* (46, § 4).

どれもが《Il faut》の導く非人称構文である。これら《私性》の刻印をうけた文を読む特権的な読者《私》には自明性をもって了解されているが故に、書記主体の《私》はテキストに不在である。

#### f) 省略語・符号

標題における符号を論じる機会に、断片や紙片の整理番号としての数字については触れた。同様の符号は他にもある。断片306-275の標題は(判読が正しければ)《A Figures》となっている。B. C... に対応するものは発見できないけれども、この A も多分、一連のテキストの順番を記す指標であっただろう。推敲の跡の

著しい長い断章の場合には、作業上の指標がテキスト内部に見られる。《気晴し》の断章(168-136)はその例である。一度書かれたあと消されたものを無視すれば、第二ページ(『草稿』, p. 70)右下方の余白にA, 三ページ目の中央や、上の左余白に円で囲まれたA, 左下にB, そして四ページの下左にC, 右下にD, 第五ページ(p. 73)左上余白にD, 左下方の余白にB, そして右下にCと、アルファベットの4文字がそれぞれ2回づつ(そのことの意味は明らかである)書き込まれている。なお第一文字については、テキストでもメタテキストでも普段はPやRに比べてやや小さく、形も小文字のそれに異ならない筆記体でしか書かない人が、標識の場合には活字体の大文字を用いていることは注目してよい。更に原稿には文字・数字以外のしるしも発見できる。書き手が新たなテキストを開始する時に頻繁に用いる+ (漢字の十の字よりは十字架の形に近いというべきか)その発達した形ともいえる卍や卍の印、また断片(時に段落)を仕切る数多くの横線などである。

これら全ては覚書に特有のセミオロジーである。標題の場合の省略に劣らず、それは遅かれ早かれ消えていく筈であった。指針は実行されることによって使命を達成するからである。『パンセ』初版は、以上挙げた符号をきれいに一掃している。

#### 4. 省略体形成のパターン

備忘録テキストの言語学的記述を終えて、今やこれらの省略体形成のパターンについて考えなければならない。言語構造の解体に法則はあるのか。ここでは、問題の微妙さに鑑みて慎重さを堅持し、いくつかの仮説を提出することで満足しよう。まず備忘録テキストの場合次に同メタテキストの場合の順で検討する。

##### I. 備忘録テキストの場合

###### I. 1, 1 動詞の脱落

備忘録メタテキストの例として挙げた (§ 6 - 3 - b) 《Cette Lettre avant le divertissement》(27) は、名詞連辞体が限定詞をもつことによって《現実化》されながら、それが直接に前置詞グループ(そこにも限定詞はある)に結合されて完全に言説化されないものであった。比較可能なテキストの例として、《Les psaumes chantés par toute la terre》(37) という、句切りが中央にある完璧な十音節詩句を忘れてはならない。同じ構造をもつ例は他にもある：

(...) Pourquoi Jésus-Christ prophétisé en son premier avènement, pourquoi prophétisé

obscurément en la manière (256-223).

これはe)の例としてみた《Il faut mettre...》(256)なるメタテキストに導かれた下書テキストである。最後の節に意味の上では対応する完全文として《pourquoi s'est-il fait prédire en figures?》(何故に彼は表徴で預言されたのか)(8-389)を参照することができる。もう一つの例：

Pourquoi le *Livre de Ruth* conservé.

Pourquoi l'histoire de Thamar (335-304)<sup>39</sup>).

これらの例は全て、孤立した名詞連辞体と完全文の中間に位置する同じ破格の形を示している。断片335に例をとれば、第一節は☆《Pourquoi le *Livre de Ruth* a-t-il été conservé?》(何故『ルツ記』は保存されたのか?)のような文を指向し<sup>40</sup>、それからの分解の過程にあると見ることができるからである。ところで、ここでは一次的簡略化によって動詞が脱落していて、それに続くことも可能な省略の対象となる名詞の限定詞は無疵のままである。その他の例文についても同様である。こうして完全文が省略の極点へと縮小されていくプロセスは次のように図式できるであろう：

I : ☆ Pourquoi le *Livre de Ruth* (a-t-il été) conservé (?) (完全文)

↓…動詞・疑問符脱落

II : (Pourquoi) le *Livre de Ruth* (conservé) (不完全文)

↓…疑問詞・属詞脱落

III : ☆ (le) *Livre de Ruth*

(括弧内は次に脱落すると推定される語)。

ここで我々は滑りやすい地に立っている。IからIIにかけての動詞と疑問符の欠落については、後者が先であることは確実に云うことができる。というのは、そもそも書き手は『草稿』においてこの語ならざる符号を付けないことが多く、特に疑問詞を伴う疑問文にこれを加えることはまず無い。もちろん疑問詞こそ文のタイプを規定するものとして本質的なのである。けれども、IIからIIIにかけて、疑問詞と属詞のうちいずれが欠け易いのか判断は困難である。尤も、《Pourquoi l'histoire de Thamar》の例は、属詞脱落の優先性を示唆するのかもしれない。

#### I, 1, 2 動詞及び限定詞の脱落

相似た困難は、次のような例では動詞と限定詞の間で起る：

Athéisme marque de force d'esprit... (189-157).

これが☆《L'athéisme est [une] marque...》のような文をめざすとは恐らく言える。というのは(同じ構造を示す《Diseurs de bons mots, mauvais caractère》549-670に対して)、他方、《Le respect est : Incommodé—vous...》(VI, 115-80)

とか《*Les respects signifient : Incommodez-vous*》(Ⅲ, 66-32. いずれも斜字体筆者)のように、動詞も限定詞も完備した形が見えるからである。なお後二者は二つの章の間のテーマ上の連繋を証明すること (cf. § 3-1, 2), またそれらが文学的には定義遊びの中でも特に謎々 (devinette) の趣をもつことを註記しておく。その構造は、《尊敬》とかけて何と解くと問い、《迷惑を蒙りなさい》と解くと答え、そのところを例えば S. 115の第二文段《*car cela est vrai...*》が明かすのである<sup>41)</sup>。ところで、与えられた《実現》としての省略体とそれが指向する完成文との間に想定することのできる中間段階において、動詞と定冠詞のいずれが先に落ちたのかを確定することは困難である。同じ省略体を示す

Instinct et raison, marques de deux natures (144-112)

についても同様である。更に

(...)/ Loi éternelle, changée (...) (294-263)

がある。尤も次に見る例は、これら二要素間の脱落の順序について判定を下すことを許すかと思われる。

### I, 1, 3 限定詞の脱落

主語の名詞連辞体から先づ限定詞が落ちた例：

Curiosité n'est que vanité le plus souvent (...) (112-77)<sup>42)</sup>

Contradiction est une mauvaise marque de vérité (...) (208-177).

先に仮定した中間形態を示すこれらのテキストは、そこにおいて動詞の方を維持している。特に断片208は有力な例である。断片112においては、《*n'est que*》から動詞のみ省くことはできないからである。

以上においては、属詞を要求するにせよ、受動態にせよ、状況補語を従えるにせよ、《être》動詞 (或いはそれに準ずる動詞) が問題である。その時、限定詞と動詞の欠損の順序は明らかに二通りある：前者が落ちて動詞が残る場合 (208), 後者が落ちて限定詞が残る場合 (37, 335)。順序はともかくとして、省略が二つの要素の双方の消失にまで進みうることを確認しておく。

### I. 2 能動態他動詞

他方、文中の他の要素との関係が異なり、直接目的補語を要求する動詞の場合ではどうか。構文はもとより、語彙に至るまでほとんど同一の次の二文を比較しよう：

Un portrait porte absence et présence, plaisir et déplaisir (291-260).

Figure porte absence et présence, plaisir et déplaisir (296-265).

十分の文法性をもつ前者に対して、後者は主語となる名詞に不定冠詞を欠いてい

る。なお前者には《La réalité exclut absence et déplaisir》が続くのに対して、後者には《Chiffre a double sens》が続く<sup>43)</sup>。文法性の欠損は限定詞に始まることがかかる。この場合にも、更に簡略化された形の下書テキストを想像することができる。図式はこうなる：

I : (Un) portrait porte absence et présence... (完全文)

☆(Une) figure porte absence et présence...

↓…限定詞脱落

II : ☆ Portrait (porte) absence et présence (不完全文)

Figure (porte) absence et présence...

↓…動詞脱落

III : ☆ Portrait : absence et présence...

☆Figure :

この種の機能を有する動詞は主語の限定詞よりも強い抵抗力あるいは惰性をもって残っていく傾向があると言うことができる。

以上取り上げた例文は全て備忘録テキスト（下書き）であり、いずれもいわゆる三人称の文章である。ところでバンヴニストが言うように、三人称とは本質的に非人称である (*op. cit.*, p. 228 sq.). この理論をもし認めないとしても、少なくとも動詞の欠落が相関的に人称性の喪失を招来することは認めないわけにはいかない。非人称化、これが無限定の記号作用に還元されていく言語に不可分の運命である。人称性喪失のプロセスは、備忘録メタテキストにおいてはもっと明らかに辿ることができる。

## II. 備忘録メタテキストの場合

完全文の項（3-e）の最後に引用した例文（S. 46）を見て戴きたい。興味ある徴候がそこに認められる。それはまず非人称構文で始まり、次いでその省略体として、努力目標を示すあの不定法現在の動詞が続く。勧告を表現する不定詞は、一種の《構造的自立》あるいはむしろ破損によって、非人称構文から派生するという仮説を立てることができよう。そのことは、原文においては非人称の主節に暗に従属している《節》を陽に従属させるという反対のプロセスをポール・ロワイヤル版による断片の補修が示す事実によって逆に確認されるだろう。1670年のテキストを見よ：

... *il faut commencer* par leur monstrier, qu'elle n'est point contraire à la raison ; ensuite *qu'elle est venerable*, & en *donner* respect ; après la *rendre* aimable, & *faire souhaiter* qu'elle fust vraye (...). (Éd. de P.-R., XXVIII, 38, p. 257. イタリック筆者).

この《qu' elle est》の追加（及び；の使用）がその事実である。このことは3-dで列挙したメタテキストにおける不定詞が全て同じ非人称構文に導かれ得たでもあろうことを推測させる。もっとも実際の出現頻度からみれば、メタテキストにおいては逆に《il faut》構文の不定詞構文への還元の方がより容易であるというべきである。作品編成に関する自己自身への勧告はまず不定詞で現れ、次に非人称の完全文で、最後に命令法二人称でとその頻度を減らすように見える。逆に言えば、省略は完全文から一種の不完全文へ、人称性を有する構文から非人称のそれへと向かう趨性を有するのではないか。図式すればこうなる：

Voyez → Il faut voir → Voir →ゼロ（註釈の場合）  
完全文           （不）完全文／不完全文  
人称性／非人称性

図式が示すように、簡略化とはまず人称性の、次に文法性の欠損という過程を辿る。これが備忘録メタテキストにおける言説の、言語に向けての解体のプロセスに関する仮説である。

## 結 論

研究の終りに至って、人は問うであろうか。これは一体パスカルなのか、と。我々は反問する：ではパスカルとは何なのか。実際、『パンセ』へのアプローチがかかわってきた様々の多かれ少なかれ重なり合った領域（神学・哲学・文学・修辞・科学...）と、それぞれの多様な側面の根底に、一つの書く行為があり、そのまた根底には我々がその諸相を検討してきたような言語作業が厳としてあるのである。たとえそれが、余りにも特殊的にパスカル的であるにせよ、或いは逆にもはやそこにおいて固有名詞が消滅するような普遍的な現象であるにせよ。

結論しよう。

1° 備忘録言語について簡略化・単純化・指標化は語りうる。我々もこれを確かめてきた。けれども省略は純粋に私的なジャンルとしての覚書テキストのみの排他的特権ではない。覚書という性格は、その書記行為の動機が何であれ、他のジャンルを侵しうるといふべきか。儉約の規則が支配する電報文における省略はよく知られている。それに日記文がある。スタンダールやジッドの日記に比べて、クロデルのそれには非常に多くの省略語を認めることができる。また、当事者の間に了解が成立している時には、書翰においてもそれは現れる。例えばパランのポーラン宛一書翰では、雑誌名の *Les Nouveaux Cahiers* 『新手帳』は les N. C. と

なり、《le pouvoir des mots》(語の魔力)は《le P. des M.》と、《les hommes》(人々)は《les h.》となっている<sup>44)</sup>。卑語の略字は論外としても、文学作品においてもいわゆる行動主義文学や記録文学に同じ現象が現れる。例えば『希望』においては、その説話を特徴づける単純過去の遍在と共に、省略体は極く控え目にしか出現しない事実がマルロオを古典的作家たらしめるのに対して、『南方郵便機』については、その飛行の場面における現在時制の方法的使用と共に、省略体は遙かに大胆に現れる。名詞止めの文章は頻繁でしかも限定詞ゼロの破格を示すこともある。あたかも証人たる語り手は、描写や敘述はいうに及ばず説話をすらすら完遂する時間を惜しむかのように。最後に、著者が意図的に未完成にした作品も存在する。例えば『こわれた物語集』には、絵筆のタッチにも似た孤立した名詞連辞体の羅列すら見ることができ<sup>45)</sup>。これは、未完成へ向けての完成を示す文学的文彩としての《ellipse》である。

2°. 備忘録言語の単純化は事実としても、重要なのは、そのプロセスが幾つかのタイプに分類できるということであり、特に少くともそのある段階で非人称化が起るという点である。様々の省略体のいずれにおいても、更には完全文においてすら頻繁に、談話を規定する状況、話しかける者と話しかけられる者つまり言語人称が構成する対話状況<sup>46)</sup>は不在である。《私》が他者に向けて開かれている繋ぎテキストにおいて動詞の欠損はなく、他方言語の自己指向性および書記主体の唯我性(solipsisme)を特徴として、二重に自閉した備忘録メタテキストにおいて優れて非人称化の徴候が現れる事実は意味深い。書記主体の隠蔽あるいは消滅は、『論理学』の著者達が証言するように<sup>47)</sup>、作者が「誰よりもよく知っていた真の修辞学」によるのではなく、「自己を名指したり《私》(je, moi)という語を用いることを避け」させる社交的儀礼から来るのでもなく、「人間的自我を無化する」キリスト教的敬虔に由来するのでもない。それは自己中心的発話に内属する本質的な逆説なのである。ロトマンのいわゆる《私—私》言語は、公共言語からの完全な自律性を獲得することができない一方、その私性にもかかわらず、否むしろその私性の故に私を確立することもならず、逆にその私性の極限において私を喪失する<sup>48)</sup>。

3°. 非人称化、書記主体の湮滅は、標題や註釈の言語学的特徴(孤立した名詞連辞体、前置詞連辞体、単独の形容詞、不定詞構文)に通底する事態でもある。それはもはや驚くには及ばない。言語が潜勢的存在レベルに留まる限りにおいて主体は定義上そこにはない。言説主体の他者に向けての発言行為(allocation)によって、それと同時に言語はその待機の惰性を破って言説に変わる。人間のこと

ばの公現 (epipháneia) である。

## 註 釈

1. 本研究の既に発表した部分の構成は、  
序  
第一章 メタテキストとは何か  
§1 テキスト/メタテキスト  
§2 メタテキストの弁別特徴  
§3 メタテキストの外延  
§4 《秩序》  
第二章 言語にとって私性とは何か  
§5 作者の意図/実現としての作品  
である。以上については、『パンセ』とメタテキスト (その1), 山口大学独仏文学研究会『独  
仏文学』第7号, pp. 1-18 (1985); 同 (その2), 山口大学文学会『文学会志』第36巻, pp.  
69-84 (1985) 参照。
2. 断片181-148, 305-274 (中見出し) 参照。《Que Dieu s' est voulu cacher》(275-242) に  
おいて補足詞は『草稿』(p. 112) ではそれ程明らかではないが, 初稿の見直しにおいて追  
加された可能性があることは注目に値する (cf. T.-A., 239, I, p. 172)。
3. 他にも断片281-249がある。
4. 《usurpation》を篡奪と訳さない理由については G. Chinard, *En lisant Pascal*, ch. V, p.  
83-95 (Giard-Droz, 1948) 参照。
5. Lancelot et Arnauld, *Grammaire générale et raisonnée*, II, ch. VIII, l' éd. de Paris, 1846, p. 84-  
85 (Slatkine Reprints, 1980)。
6. 同じくコーパス外の冠詞ゼロの形 (564-685) 参照。
7. L. は G. 261 と共にこれを落としている。『草稿』(p. 123) には極く細い字でそれが読める。
8. コーパス外には, 《Contre la fable d' Esdras》(415-949), 《Sur Esdras》(417-953) 等を  
見る。
9. *Lettre de Blaise et de Jacqueline à Gilberte*, L. O. C., p. 273。
10. Lancelot et Arnauld, *op. cit.*, III, ch. I, p. 49. Cf. Nicole et Arnauld, *La logique*, I, ch. II, *op.*  
*cit.*, p. 47-48。
11. 論理学の用語としての《dilemme》については Arnauld et Nicole, *op. cit.*, III, ch. XVI, pp.  
298-308. その *Pensées* における唯一の用例については断片28-409参照。
12. L. O. C., p. 528; T.-A., I, p. 159, n. 4; G. I, p. 162参照。
13. それぞれの議論については, S. p. 30, n. 2; Mesnard, *op. cit.*, p. 42-43参照。
14. 尤もこの標題は写本にしか見出されない (『草稿』, p. 152; T.-A., I, p. 252参照)。なおコー  
パス外には《Nature corrompue》(736-491) なるタイトルが見える。
15. 箴言の例は断片66-32, 115-80にも見る。このジャンルのテキストが可能な読み手による  
暗黙の言表の否定として実現されることは, Serge Meleuc, 《Structure de la maxime》

- (Langages, N° 13, p. 69-99, 1969) が変形文法を用いて証明している。
16. cf. La Bruyère, 《Amas d'épithètes, mauvais louanges》(Les Caractères, I, 13). 言語的実現としての諺の特徴については, M. Cressot, *Le style et ses techniques*, p. 114 (P. U. F., 1969); É. Benveniste, 《La phrase nominale》(1950), *Problèmes de linguistique générale*, I, pp. 162-165 (Gallimard, 1966); A. G. Greimas, *Du sens, essais sémiotiques*, 《Les proverbes et les dictons》, p. 309-314 (Seuil, 1970) 参照。
  17. 若干の例は, XXIV, 335-304, 336-305, 340-309, 341-310 (*Le Manuscrit*, pp. 130-131) に見る。
  18. J. Mesnard, *op. cit.*, p. 40-41. Faugère の版とは, *Pensées, fragments et lettres de Blaise Pascal* (1844) である。
  19. 84ページの記載はA. P. R か(S. L. の読み)とも見えるが, A に続く点は省略符にしては少し離れすぎていると見える(G. 139の読み)。この判読が正しければAに省略符は不要になる。
  20. Poi Ernst, *La trajectoire pascalienne de l'apologie*, p. 8-11, citée par G., I, p. 288, n. 2.
  21. 今日の「パンセ」研究におけるこの語の濫用への警戒は, E. Morot-Sir, 《Du nouveau sur Pascal?》, *Romance Notes*, XVIII, 2, p. 1-8 (1977) が表明している。
  22. *Le Factum pour les curés de Paris* (fév. 1658), *L. O. C.*, p. 471. また *Le Cid* をめぐる論戦パンフレットの一つに, *Apologie pour Monsieur Mairet, contre les calomnies du sieur Corneille de Rouen* (1637) なるタイトルも見える (*Œuvres Complètes* de P. Corneille, I, p. 1512, n. 3, La Pléiade, Gallimard, 1980)。
  23. ラテン語では《pro》が来る。cf. J. H. Newman, *Apologia pro sua vita* (1864)。
  24. この文彩の説明は, De Jaucourt, art. 《Prosopopée》, *Encyclopédie*, T. XIII (1765), 499 a-b; A. Pellissier, *op. cit.*, p. 208-211; P. Fontanier, *Les figures du discours*, éd. G. Genette, p. 404-406 (Flammarion, 1977); J. Paulhan, *Traité des figures ou la rhétorique décryptée* (1953), *Œuvres Compl.*, II, p. 206 (Cercle du Livre Précieux, 1966) 等に見よ。
  25. Duclos, *Remarques sur la Grammaire générale et raisonnée*, *op. cit.*, passim; *L'Encyclopédie*, art. 《Figure》(Du Marsais), T. VI (1756), 769 b 参照。
  26. (人間の不均衡)。斜線筆者。この9は左欄外にぎざぎざ円で囲まれた書き入れである。「草稿」, pp. 93, 94, 102 参照。
  27. S. p. 125; T.-A., I, p. 138; G. I, p. 297.
  28. F. Deloffre, *Stylistique et poétique françaises* (C. D. U. et SEDES, 1974, 3<sup>e</sup> éd.)。
  29. P. Guiraud, cité par J. C. Chevalier et autres, dans la *Grammaire du français contemporain*, p. 220 (Larousse, 1964)。
  30. G. Guillaume, *Leçons de linguistique*, 1948-1949, Série B, p. 158 (Presses de l'Université Laval, 1971). *Le Problème de l'article...* (1919) における言語／言説の区別の重要さは殊更に言うまでもない。ギヨームが, ソスユールから発して思索を展開することを主張していた時期においてすら, 少なくともこの点については構造主義の祖を批判することが起る。Voir. *op. cit.*, 《Conférence du 10 fév. 1949》, p. 94.
  31. M. Cressot, *op. cit.*, p. 108.
  32. ロトマン著, 磯谷孝編訳『文学と文化記号論』所収, pp. 97-134 (岩波, 1979, 1982 第二刷)。
  33. ドイツのテキスト学者達は, 言語的環境を《cotexte》と呼び, 状況的環境を《contexte》とよんで区別しているという。Cf. C. Kerbrat-Orecchioni, 《L'ironie comme trope》,

- Poétique, N° 41, p. 111 (fév. 1980).
34. De l' *Esprit géométrique*, L. O. C., p. 352も参照。
  35. T.-A. 156は《Athéisme : marque...》と印刷している。定義遊びのテキストである。
  36. 文法的主語 (sujet) と言説主体 (及び話しかけられる相手) としての言語人称 (personne) との区別については, É. Benveniste, 《Structure des relations de personne dans le verbe》 (1946), P. L. G., I, *op. cit.*, p. 230-232参照。
  37. J. C. Chevalier et autres, *op. cit.*, p. 372. 他に説話の, 自問の (délibératif), 感嘆の不定詞がある。
  38. 因にイタリア語では, 不定詞の否定形が禁止を表わすためによく用いられることを思い出そう。Ex. 《Carlo, non parlare così forte !》. Cf. K. Katerinov e M. C. Boriosi, *La lingua italiana per stranieri*, 3<sup>a</sup> ed., p. 229 (Perugia, 1976)。
  39. Cf. L : 《... Ruth, conservé》. 『草稿』 (p. 130) には Ruth に続いて終止符を見る。意味については断片268-236及び『創世記』第38章を見よ。
  40. ☆印は『パンセ』に現れない形。この作文の一つの根拠になるのは Havet の註解テキストである : 《Le livre de Ruth a été conservé à cause de la généalogie qui le termine...》, cité par B. 743, p. 681, n. 2.
  41. 註釈15, 16, 35参照。文学ジャンルとしての諺 (cf. S. 549), 格言, 謎々, 箴言等の形態論的(また社会学的) 区別と関連については, André Jolles, *Einfache Formen* (1930), trad. fr. par A. M. Buguet, *Formes Simples* (Seuil, 1972) 参照。
  42. S., G. 72の句読法。L., B. 152, T.-A. 77は vanité で終止符を打つ。初版はこう補完する : 《La curiosité n'est que vanité. Le plus souvent...》 (XXIV, 9)。
  43. S., T.-A. 262, B. 677のテキスト。L., G. 248は《Chiffre à double sens》を与えている。『草稿』 (p. 117) にはアクセント符号はない。けれども, この前置詞にアクセントをめぐらしたに付けることのない書き手においてそれは保証にはならない。いずれにせよ, 二つのテキストがその実現する文法性の度合いについてそれぞれ首尾一貫していることに注目しよう。
  44. Voir B. Parain à J. Paulhan (du 31 mai 1938), *La Nouvelle Revue Française*, N° 369, p. 181 (oct. 1983)。
  45. P. Valéry. *Histoires brisées*, *Œuvres II*, *op. cit.*, p. 414-415. なおこの作品の《緒言》 (p. 407-408) は, 小説説話の恣意性批判としても, また《non-finito》美学の宣言としても面白い。
  46. Cf. G. Guillaume, *Leçons de linguistique*, 1948-1949, Série C, la leçon du 17 décembre 1948, surtout p. 48-49 (Les Presses de l' Université Laval, 1973); É. Benveniste, *op. cit.*, pp. 228, 241-242.
  47. Arnauld et Nicole, *op. cit.*, III, ch. XIX [XX], p.350. Cf G. Périer, *La vie de M. Pascal* (2<sup>e</sup> version), M. O. C., I, p. 635 et L. O. C., p. 30. Et un propos attribué à Pascal (L. 1000)。
  48. 《転位語》 (shifters, embrayeurs), 特に文法的人称と時制の消滅は, ある種の分裂症 (スキゾフレニー, 例えばヘルダーリンの場合) の最も典型的な徴候であるという。Voir R. Jakobson et K. Pomorska, *Dialogues*, trad. fr. M. Fretz, p. 131-132 (Flammarion, 1980). Cf. *Essais de linguistique générale*, I, ch. 9, p. 176-196 (Minuit, 1963)。